破滅のアレゴリー
—— ダンの『魂の歴程』について ——

竹　永　雄　二
（英米文学研究室）
（平成２年10月11日受理）

はじめに

ダン（John Donne, 1572－1631）の『魂の歴程』（*The Progresse of the Soule,* 1601）は，ピタゴラス（Pythagoras, 582？－500？B.C.）の「魂の輪廻」（metempsychosis）という説を利用した，極めて風変わりな，未完の叙事詩であり，その内容は，魂が移り住む様々の動植物の破滅の系譜である。この作品の冒頭部分で，ダンは叙事詩を書く意気込みを次の様に表わしている。

> But if my dayes be long, and good enough,
> In vaine this sea shall enlarge, or enrough
> It selfe; for I will through the wave, and fome,
> And shall, in sad lone wayes a lively spright,
> Make my darke heavy Poem light, and light.
>
> （ll. 51－55）

自分の人生が十分長く，それなりにいいものであれば，現実世界という海がどんなに荒狂おうと，情熱を失うことなく，荒波を乗り切り，自分の暗く重い詩を明るく，軽やかなものにしてみせると，ダンは叙事詩を書くという行為を長い航海に喩えて，その成就への強い決意を示している。ここで注目して置きたいのは，「自分の暗く，重い詩を，明るく，軽やかなものにする」という一行である。文脈上，「暗さ，重さ」とは，魂の旅の出発地が楽園，またはチグリス，ユーフラテス河にあるから，それは原罪によるものと考えられる。それに対して，「明るさ，軽やかさ」とは，旅の終着地がイギリス，またはテムズ河にあると述べられているから，それは文明の進歩によってもたらされたものと考えることができるだろう。さらに，この「暗さ，重さ」と「明るさ，軽やかさ」という意味の対比を，ダンの詩全般の中で考えてみると，前者はダンの詩の背後に，重く沈澱した感情的「暗さ，重さ」であり，後者は，その呪縛からの解放を求めての知的，遊戯的「明るさ，軽やかさ」と解釈できないであろうか。ダンの詩を読む時，多くの場合，読者は知的離れ業による遊戯的軽妙さに驚嘆することはあっても，詩全体として明るさを感じることはあまりないように思う。背後に緊迫し，硬直した感性，時には，健康な感性の発育を阻害する毒のような「暗さ，重さ」を感じてしまう。これは，ダンの詩の出発点，その根源に存在するダンの世

界に対する，人間に対する一種のニヒリズム，当時の言葉で言えば，メランコリーと呼ぶことはできないであろうか。以下，この様な視点から，『魂の歴程』を破滅のアレゴリーとして考察を加えていきたい。

〔1〕

ダグラス・ブッシュ（Douglas Bush）は，ダンがこの作品を書くことになった契機の一つとして，エセックス伯爵（Earl of Essex, 1566－1601）の処刑の影響を匂わせている。[1] この作品は，冒頭に1601年8月16日と製作の日付が明記されているが，エリザベス朝の若き英雄が断頭台の露と消えたのは，その数ヶ月前のことであるから，このセンセーショナルな事件との関係を憶測したくなるのも自然のことであるように思える。

ダンは1597年のエセックス指揮下のイギリス艦隊の，二度に渡るアゾレス諸島（The Azores）遠征に参加している。そしてその時の彼の直接的経験である嵐と凪の模様は，友人クリストファー・ブルック（Christopher Brooke）宛の韻文書簡の中で表わされている。この *The Storme* と *The Calme* と題された二つの書簡には，ダンの破滅していくものへの異常な関心と，その細部に渡る適格な描写力，擬似英雄詩（mock-epic poem）的調子等，[2]『魂の歴程』につながっていく多くのものがみられる。

Like *Bajazet* encag'd, the shepheards scoffe,
Or like slacke sinew'd *Sampson,* his haire off,
Languish our ships. Now, as a Miriade
Of Ants, durst th'Emperours lov'd snake invade,
The crawling Gallies, Sea-gaoles, finny chips,
Might brave our Venices, now bed-ridde ships.
Whether a rotten state, and hope of gaine,
Or to disuse mee from the queasie paine
Of being belov'd, and loving, or the thirst
Of honour, or faire death, out pusht mee first,
I lose my end: [3]

（*The Calme,* ll. 33－43）

かっては，名も無き羊飼いに過ぎなかったタンバレン（Tamburlaine）に権力の座を奪われ，籠に閉じ込められ嘲笑されるトルコ王バジャゼイス（Bajazet）の様に，[4]また，髪を切り取られて，かっての怪力も見る影もないサムソン（Samson）のように，凪を前にして本来の力を発揮できない戦艦。様々の思いが錯綜する中で，青春の熱い血潮に駆り立てられるようにやって来たのに，今や目的を失ってしまったダン自身。停滞感，無力感，思わくと現実との落差の大きさに，自己に投げつけられた自嘲的滑稽感，また，表現としては動物比喩の多用等，『魂の歴程』の，いわば破滅のアレゴリーへと発展していくダンのニヒリズムの萌芽をここにみることができるように思う。

では具体的に作品の中で魂の歴程を追ってみることにしよう。魂が最初に宿った楽園の禁断のりんごは，蛇の誘惑に負けたイブにもがれ，アダムと共に食されることになる。「母親が水源を毒し，その娘達に支流である我々も汚染されている」

The mother poison'd the well-head,
The daughters here corrupt us, Rivulets;
(ll. 93−94)

と表わされているように，原罪によって始まる魂の歴程において，魂は罪，そして死の媒体であり，それを拡散させる役割を果すと捉えられている。

次に魂が宿るマンドレイク（mandrake）は，その実は妊娠の力を増し，逆にその葉は欲情を抑えるという二重の効能をもつ薬草である。しかしその有用性がここでは逆に災いして短命に終ってしまう。「無用の雑草であったら長生きできたであろうに……」

Unvirtuous weeds might long unvex'd have stood;
But hee's short liv'd, that with his death can doe most good.
(ll. 168−170)

という一文には，名も無き平凡な一市民である方が，へたに能力を持つよりも平安な人生が過ごせるという，アイロニカルな反英雄主義，反叙事詩の視点が窺える。

この段階で魂が有するvegetable soul の機能は「成長」（growth）にあるから，XIV 連からXVI 連に渡って，マンドレイクの誕生と成長が意識的に強調して，細かに描かれている。ただその描写は，英雄が誕生したかの如く，叙事詩ばりの雄々しい，格調の高い表現で表わされていて，実体の矮小さと誇張表現の落差が滑稽感を生み出している。それは特に「若き巨人として，彼はそこに二王立ちになる」

A young Colossus there hee stands upright,
(l. 153)

という一行に際立っている。

次に魂は雀（sparrow）に宿る。形の上ではこれは魂がvegetable soul からanimal soul へと進化したことを示すが，実際は，魂が果す機能はvegetable soul のgrowth の機能にとどまっている。つまり雀はそのエネルギーの全てを生殖行為に費やしているのである。XX 連の描写などは，ダンの初期の恋愛詩にみられるlibertine 的特色を思い起こさせる。雀は生まれるとすぐに成長し，発情して，相手かまわず，時も場所も選ばず，ただひたすら生殖行為に没頭するのである。それは雄だけのことではなくて，雌もまた同じく，この自由という特権を存分に行使するのである。結果として，性行為に耽るものは生命を縮めるという，中世来の俗信をより一般化したXXI 連の最後の一行に，風刺を込めて表わされているように，「自己管理能力に欠ける雀は，三年で生命を終ることになる。」

Ill steward of himself, himselfe in three yeares ends.
(l. 230)

ここまでの段階では，当然の事ながら，魂が宿る生物の生殖，誕生，成長が強調して描かれている。特にその生殖行為の捉え方はダン特有のもので，重い原罪感が込められているのと同時に，極めて即物的，生理学的視点から捉えられている。性の描写におけるチョーサー（Geoffrey Chaucer, 1340？－1400）やシェイクスピア（William Shakespeare, 1564－1616）のおおらかさや，スペンサー（Edmund Spenser, 1552？－1599）の豊じょう感とはほど遠く，ダンの場合，遊戯性という衣装をはいでみると，性の醜悪さ，さらにはその貧弱感が背後に残るように思われる。

(2)

次に魂は小魚に移り住む。まだ生まれたばかりの小魚で，その種類も判別できないような形状をしている。この小魚は，悠然と泳いで来た白鳥にあっという間に食べられてしまう。ここから，弱肉強食の自然界での生物の生存闘争が描かれていく。[5] より能力のあるものだけが生き残っていくという，極めて自然科学的捉え方で，『妖精の女王』（*The Faerie Queene*）に代表されるような，一般の叙事詩における，美徳対悪徳という，倫理的敵対の構図とは極めて対照的である。[6] この弱肉強食の生物の生存闘争は，また，現実の人間生活のアレゴリーとなっている。白鳥は自分より力の無いものは食べることはできても，「あまりに速いもの，あまりに大きいもの，見事に武装しているもの」

All, but who too swift, too great, or well armed were.
(l. 240)

は餌にすることはできない。

低次のanimal soulの段階では，生物の形態の大小は，自然界の中での力関係において重要な意味をもつ。この大と小との生存闘争が，叙事詩の，多くの場合，正義と悪との雄壮な戦闘場面と呼応するような形で扱われ，mock-epicとしての効果を高めている。同時にそれは現実世界の権力構造のアレゴリーとなっているが，ダンの力点は，小なるもの，支配されるものの上に置かれているように思える。

白鳥の胃の中で消化され，小魚が死滅すると，まだこの段階で，すぐれた肉体を運命に認められなかった魂は，また別の魚に戻って行かざるを得ず，ゆえに，また新たなえじきとなってしまうのである。「なぜなら，誰に対しても抵抗せず，不平を言わないものは，確実に葬り去られるからである。弱点は虐待を招くが，沈黙はそれを太らせる」

For, he that can to none
Resistance make, nor complaint, sure is gone.
Weaknesse invites, but silence feasts oppression.
(ll. 248－250)

最後の一文には激しい政治的風刺が込められている。権力者の下にあって，ただおとなしく，全てに服従する弱者の生き方へのダンの反撥と，彼自身の権力への抵抗の意思が表わされているように思う。

この魚は海に向かって旅を続けるが，途中一度，隠し網に進路を妨害される。その網の中には飢えたカマスも捕まっている。興味深いことに，ここでは，魚は，弱者の象徴である体の小ささが幸いして，二つの死を免れることができる。小さきがゆえに，無価値さゆえに，カマスの関心を引かず，また大きな網の目を通り抜けることができる。しかし，弱者にはやはり過酷な運命が待っている。川が海に合流する，淡水と海水の境い目まで来ると，魚は進路を決めかねて，しばらくその場に漂う。皮肉なことに，水面下の物体は，一種の水のレンズの作用によって，上から見ると，実体よりも拡大されて見える。

So farre from hiding her guests, water is,
That she showes them in bigger quantities
Then they are.
(ll. 271－273)

以前には，小さきがゆえに死を免れた魚も，この時上空にいたみやこ鳥（sea pie）に見つかり，捕まえられてしまうが，それも飢えのためではなく，ただ戯れのためである。この水中から上空へ，下から上への運動は，アレゴリーとして見れば，魂の進化と錯覚しそうになるが，それは自律的なものではなくて，「持ち上げたものの道具となり，食糧となるための上昇に過ぎない」

It's rais'd, to be the Raisers instrument and food.
(l. 280)

ここには，人間のより高い地位への昇進願望に対して，たっぷりアイロニーが込められている。

一体，魚は他の種に対してどんな危害をもたらすというのか。災いをもたらすことなど全くないのに，一方的に他の種の犠牲にさせられているのである。そして人間は一種の罪滅しとして，断食（Fasts）としょく罪（Lents）の日を制定しているが，それは魚を食糧として殺すことの一種の合法化であろう。

Yet them all these unkinde kinds feed upon,
To kill them is an occupation,
And lawes make Fasts, and Lents for their destruction.
(ll. 288－290)

ここには，風刺というよりも，自然界における弱肉強食の過酷な実体が呈示されているように思われる。

この小魚を食べてしまったみやこ鳥は，陸からの順風に乗って，最初は楽々と海上を飛んでいくが，ついに力尽きて，途中で死んでしまう。それは，時流に乗って好調な道を歩むが，つい満心して，それが自分の力量だと錯覚してしまう人間の愚かさのアレゴリーであろう。この鳥の魂

がその後どう転身していくかはここでは扱われていないが，「肥満した美食家」を寓意するこの鳥の魂は，今日でも，ある重要な地位にある役人の中に生きているとダンは釘を打っている。

次に魂は小魚という小なる世界から一転して，鯨という巨大な世界に移り住むことになる。その巨大さは，ダンの特色でもある，具体的な地理的名称を使って表わされている。それは「ギリシアからモレア半島が切り離され，また地震によって遊離したその半島が泳ぎ出したかのごとき巨大なものである。」

To such vastnesse as, if unmanacled
From Greece, Morea were, and that by some
Earthquake uprooted, loose Morea swome,
(ll. 303－305)

エピック・スィミリーになっているが，その大げさな誇張は mock-epic としてのユーモラスな効果をあげている。しかし，さらに続けられている比喩表現の中には，ユーモラスさの中に破滅の要因が暗示されているように思える。まだ小供の鯨にすぎないのであるが，この鯨の外形は，「全ての希望がついえた時の，反転した巨大船，帆を降ろした船体のようだ」

when all hopes faile,
A great ship overset, or without saile
Hulling, might (when this was a whelp) be like this whale.
(ll. 308－310)

と喩えられているが，巨大さゆえの弱点，不能性，特に機動力の欠除が暗示されているように思う。

さらに続けられている描写からわかることは，この鯨によって寓意化されているものは，一つの強大な国家であるということである。激しい風刺が込められている， XXXIII 連の結びの二行に明らかなように，「一つの巨大さ（国家）は，無数の罪も無い小なるもの（市民）を犠牲にして」

and is it of necessity
That thousand guiltlesse smals, to make one great, must die?
(ll. 309－310)

造られたものである。しかしこの難攻不落の巨大な鯨，または国家も，自然界の全ての生物と同じく，栄枯盛衰の運命を避けることはできない。このことは，XXXIV 連の結びの三行に簡潔に表わされている。「最大になることは，破滅に最も近づくことでもある。完成に休止はなく，巨大さに一時期はあっても，決して静止はない。」

'Tis greatest now, and to destruction
Nearest; There's no pause at perfection;

Greatnesse a period hath, but hath no station.
(ll. 338−340)

一つの格言ともいえるこの表現には，ダンの鋭い歴史認識が表わされている。

具体的には，鯨は，その巨大さゆえの機動力の欠除という弱点を，尾長鮫（thresher）とメカジキ（swordfish）に鋭く突かれて，あえなく死んでしまう。尾長鮫は鯨の背後に回って，その強じんなひれを鋭く打ちつける。攻撃を回避するため，鯨が水中に潜ろうとすると，今度は，下からメカジキがその剣状の吻を施回させながら，鯨の腹部をえぐるのである。この場面は，叙事詩の雄壮な戦闘場面のパロディーともいえる。さらに政治的アレゴリーとしてみれば，尾長鮫とメカジキの共同した，無駄の無い，効果的な攻撃は，綿密，周到に計画された，少数の精鋭部隊によるクーデターとも受けとれよう。鯨の最期は，かっての栄功を失墜し，民衆の前に引きずり出された独裁者のイメージと重なり，その無残な最期が，特に'now a scoff, and prey' という表現で強調されているように思える。

次に魂は「卑しいねずみの窮屈な僧院」（the streight cloyster of a wretched mouse）に移り住む。先に見られた，小なるものによる大なるものの破壊は，ここでは，この卑しいねずみと，「自然の偉大な傑作」（Nature's great masterpiece）である象との関係で表わされている。尾長鮫とメカジキの鯨への攻撃は外からの攻撃であったのに対して，ねずみの象への攻撃は内部から成される。ねずみは象の体内に入り込み，脳にはい上ると，そこで生命線をかみ切ってしまう。「地下を掘り尽くされた町のごとく，殺害された象は崩れ落ちる。」

Like a whole towne
Cleane undermin'd, the slaine beast tumbled downe;
(ll. 394−395)

象とともにねずみも死んでしまうことになるが，政治的アレゴリーとしてみれば，これはテロリズムを指すものと考えられる。もとより生きて帰ることなど考えない，権力の座である巨大な宮殿に入り込み，国家の要人を狙う暗殺者の行為を暗示しているように思われる。

これまで自然界の中での生物の生存闘争が，大なるものと小なるものとの力関係で表わされて来たが，特に最後の二例に見られた，小なるものによる大なるものの転覆には，単に一般的政治的アレゴリー以上の，ダンのこの時期のパーソナルな感情が反映されているようにも思える。前にも述べたように，この作品が書かれた1601年８月の数ヶ月前に，時代の寵児であったエセックス伯が，反乱に失敗し処刑されている。この事件の衝撃は，ダンも含め，この時代の若者達にとって相当なものであったと想像される。また，ダン自身の個人的問題としては，彼自身の人生の大きな転機となるアン・モアとの結婚が数ケ月後に行われることになるのである。つまり，社会的問題であれ，個人的問題であれ，ダンの心の中で，外圧への緊張が著しく高まっていたのがこの時期ではなかったろうか。このような外圧へのダンの反撥と反抗の姿勢は，幾つかの恋愛詩，特に『聖徒加入』（*The Canonization*）などに色濃く表わされているが，ここでも，動物間の生存闘争という，mock-epicとしての文学的衣装の背後に，この時期のダンの危険な感情が隠されているように思える。

(3)

次に魂は，胎児の狼の中に移り住む。ここからこの作品の最後までの魂の歴程は，これまでにない，どす黒い罪の様相を滞びていく。成人したこの狼は，アベルの飼う羊の群を荒し回る。アベルの忠実な雌の番犬に侵略を阻止されるようになると，この狼は，性の力に訴えることによって，つまり，色仕掛けで，この雌犬を自分に従順なものとする。繁殖のための性の交わりは，vegetable soulの正常な機能であるが，策略のための 'Embracement of love' は極めて異常である。そして狼の虜になってしまった雌犬は，アベルが近くに居る所では，吠える真似をするが，狼を決してかんだりはしなくなる。「主人に対する忠誠心は完全に忘れ去られても，愛が忘れられることはなかった」

Her faith is quite, but not her love forgot.
(l. 425)

という一行は，極めてアイロニカルな響きをもっている。

このような異種の交わりから誕生した新種の獣は，当然の事ながら，狼と雌犬の二つの属性を共有している。つまり，母親のように羊の群から狼を追い払うかと思えば，逆に，父親のように羊を自分のえじきとするのである。しかし，ついにその悪業が露見して，猟犬からは狼として追われ，狼からは犬として追われ，二重スパイの悲惨な末路を迎えることになる。このエピソードは，文字通り，二重スパイのアレゴリーであり，特に，利益の追求には手段を選ばず，その時々の状況によって，態度を豹変させる政治的人間への風刺が込められているように思う。さらに，これはかなり的外れな，勝手な推測かもしれないが，どこかダンの英国国教会への風刺が感じられないだろうか。カソリシズムとプロテスタンティシズムの，いわば折衷様式ともいえるアングリカニズムの，ある時は一方を支持して他方を迫害し，またある時はその逆の対応をするという，政治的策略を身につけた宗教への批判が感じられないだろうか。

次に魂は陽気な猿（toyful ape）の中に宿る。アダムの五番目の娘，シファテェシア(Siphatecia）と一緒に過ごすことが多かったこの猿は，幼い彼女に恋心を抱くようになる。言葉を話す能力がないため，彼は「無言の合図」（mute signs）で，彼女に恋心を伝えようとする。彼女が通る所をいつも通ったり，果実を彼女のために集めたり，百面相をしたり，とんぼ返りをしたりして，彼女を喜ばせ，彼女の心を動かそうとする。この様な手段が効果をあげないことがわかると，次に猿は，「自然を恐れることもなく，褐色の前足で，そっと彼女の子山羊の皮で作られたエプロンを持ち上げる。」

And up lifts subtly with his russet pawe
Her kidskinne apron without feare or awe
Of nature; nature hath no gaole, though shee have law.
(ll. 478－480)

多くの批評家は，『魂の歴程』に対して極めて批判的である。グリアスン（Herbert J. C. Grierson）は，この作品は全くの失敗作であるのみならず，醜悪な作品であると言っているし，

ボールド（R. C. Bald）は，ダンの全作品中で最も失望させる作品であると酷評している。[7]特に彼等が嫌悪感を感じているのは，一つ前のエピソードで示された，狼と雌犬の交わり，そして猿が少女に対して性的悪戯をするこの箇所である。つまり，それは異種の性的交わり（Sins against kind）であり，寓意的衣装では覆いきれない，何か生々しいグロテスク感が伝わってくる。文脈から判断して，このエピソードには，正常な情欲だけでは満足し切れなくなって，「少年や獣の美しさに魅せられる」

beauty they in boyes and beasts do find.
(l. 470)

権力者達の倒錯した色情への風刺が込められていると思われる。文学的アレゴリーとしては，猿の少女への求愛の前半部などには，猿まねのごとき宮廷風恋愛詩への風刺があると思われる。さらに，パーソナル・アレゴリーとして見ると，ダン自身とアン・モアとの恋愛関係に対する，ダン自身の self-mockery のようなものが感じられてしまう。さらに，これも飛躍した解釈ではあるが，政治の宗教への介入という，政治的アレゴリーもあるかもしれない。

ただ，様々な寓意的解釈は別にして，魂の歴程という大きな視野から見れば，これらの二つのエピソード，つまり，狼と雌犬，猿と少女の性的交わり（勿論，後者は未遂である）で強調されていることは，異種の交わりということであり，それによって，より複雑で混沌とした性質をもつ魂が形成されていくということであろう。

最後に魂がカインの妹であり，妻となったテメック（Themech）に宿ったところで，つまり rational soul の誕生で，この作品は未完のまま終っている。楽園のりんごの実に始まり，マンドレイク，雀，魚，鯨，ねずみ，狼，猿を経てテメックへ至る魂の歴程は，vegetable soul から animal soul を経て rational soul へ至る過程であり，それは確かに，一面において魂の progress となっている。しかし事実は，これまで見て来たように，魂の罪の畜積の歴程に他ならない。そして，魂が宿った個々の生物における罪の経験は，ダンがこの作品の冒頭部で明言しているように，記憶として残ることになるから，最後に登場するテメックは，「女であるために，狡猾さ，強欲，欺まん，情欲，その他の悪徳を存分に知っている」

she knew treachery,
Rapine, deceit, and lust, and ills enow
To be a woman. *Themech* she is now,
(ll. 50 −509)

つまり，破滅の潜在能力をたっぷり備えた女性の登場ということになる。このような魂の歴程の延長線上にあって，ダンが最後に魂を宿らせようと予定していた現在のある人物が，例えば，エリザベス女王であったにせよ，カルビンであったにせよ，それは悪徳の現化ともいえる人物になったことは十分推測できることである。ゆえに，風刺的叙事詩としてのダンの意図は，未完で終っているにしろ，それなりに達成されているように思える。

結 び

前にも述べたように，ダンはこの作品の冒頭で，自分の作品を「暗く，重い」ものから，「明るく，軽やか」なものにすると表明していた。だが，mock-epicとしての軽やかさはある程度達成されているとしても，この作品の中に明るさ，または光を見い出すことは困難である。ダン自身もこのことを認めていて，この作品を「陰気な作品」(Sullen Writ）だと詩の最後で言っている。短絡的な推測であるが，作品を'sullen' ならしめているのは，この作品を書いた時のダンの精神状態が，ニヒリズム，当時の病理学的用語で言えば，melancholyの中にあったからだと思われる。十年後，『魂の歴程』は，全く異なった構想のもとに書き始められる。ダンの作品の中でも，傑出した出来栄えであると評価の高い，二つの『追悼記念詩』（*The Anniversaries*)である。この作品には，『魂の歴程』にみられた，遊戯的軽さは全く存在しないが，逆に，宗教的光明にあふれている。どうひいき目に見ても，『魂の歴程』を，作品全体として成功しているとは言い難いが，魂，つまり人間の内面的世界へのダンの深い関心が，断片的に表わされ，その断片が『追悼記念詩』の土台になったことは間違いないように思われる。

最後に付言すれば，古いものと新しいものの混在がダンの詩の魅力の一つである。この『魂の歴程』も，過去を振り返れば，『転身物語』（*Metamorphoses*）の世界につながっていくし，未来を見渡せば，『種の起源』（*Origin of Species,* 1859）につながっていく。一見，ゆがめられたかにみえる想像力が予兆する真実の大きさには，何か空恐ろしい気持を禁じ得ない。

notes

テキストは以下のものを使用した。引用は全てこの版による。

W. Milgate ed., *The Satires, Epigrams and Verse Letters of John Donne* (Oxford University Press, London and New York, 1967)

1) Douglas Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century.* 1600－1660. (Oxford University Press, London and New York, 1945) p. 134

2) Milgate ed., 上掲書. Intoroduction.
Milgateは *The progresse of the Soule* を mock-epicという視点から択えている。

3) Milgate ed. 上掲書. pp. 58－59.

4) ここで使用されている 'scoff', という語は，*The Progresse of the Soule* の中では，尾長鮫とメカジキの攻撃を受けて死んでしまう鮫に対して使われている。

6) この作品では，virtueという語が二度出てくるが，その意味は極めて即物的である。一度目は，マンドレイクの鎮静剤としての効能を意味し，二度目は女性の性器の暗喩として使われている。

5) 生存闘争という見方は，次の論文より教えを受けた。
W. A. Murray, *What Was the Soul of the Apple? (Review of English Studies. n.s.* 10, 1959) pp. 142－55
なお，この論文は次の研究書に再録されているものを利用した。
John R. Roberts ed., *Essential Articles for the Study of John Donne's Poetry* (The Shoe String Press, Inc., Conneticut, 1975) pp. 462－74.

7) *The Progresse of the Soule* の批評史については，次の研究書にまとめられている部分を利用させて頂いた。
John Carey, *John Donne Life, Mind and Art* (Faber and Faber, London and Boston, 1981) p. 148.

（平成２年10月11日受理）